

「俳写」考

小林 尊晴

幾年もの間静かなブームと言われてきた俳写真が、このところ同時多発的に、各メディア等に取り上げられてきたのは、それなりの熟成期間を経て萌芽したものだと思えます。

一般の人、特に若い人々が日々拡張するネット上のブログを通して、俳句への敷衍の低さ、写真掲載の手軽さを次第に認識し楽しみ始めたに違いありません。画質の向上した写真画像と、文字の組合わせは、モニター上で見た目にも一息つける空間です。自分の撮った写真に、俳句や詩をコメントとして配置したくなる推移は充分理解出来ます。

「俳写」を始められる方の多くは、本格俳句や写真に対してそれ程の垣根は無く、私のブログ「居酒屋ひぐらし」にも「こんなものでも良いのでしょうか？」とフリースタイルで参加してまいります。

デジタルのコンパクトカメラに移行して、誰でも失敗なく写せる写真。俳句でも、川柳でも、詩でもそれに添える。いわば写真日記としてのスタートです。

俳写仲間のコンパクトカメラが、いつの間にか一眼レフカメラになっていたり、リュックの中に季語手帖や花図鑑を忍ばせて、散歩

を始める人も増えてまいりました。これも、自分の写真作品に文芸的な要素を加える事で、新たな自己発見があるのかも知れません。

プロシユーマー

アルビン・トフラーが「第三の波」として、情報化時代の幕開けを著し、その中にプロシユーマプロデューサー（生産者と消費者の顔を併せ持つ）の人々が登場する事を説きました。専門家用の設備をしていなくても、それなりの作品づくりは出来る時代。個人の創作活動のエネルギーはネットと言う簡単システム上で表現されて来ています。

しかし、データとコンピュータだけでは、文芸は発展しない訳で、やはりそこにはプロのスキルが必要です。

「俳写」が新ジャンルの庶民文芸として、発展して行く為には、何が新しい時代のプロスキルなのか、真摯に考えてゆく必要があります。

さらに変化しつつあるメディア

俳写写真の在り方の一例として、参考にと俳句DVD版「嘘」を、姜瑛道氏より進呈されました。拝見して、虚実入り交じった恋の句集は、吉行淳之介の世界を彷彿とさせるナレーションとスチル写真と音の編集。

前述のプロシユーマーを唸らせるプロ集団の仕事と納得致しました。いづれ、この方向は俳句を立体的に表現させる短編映画に進んで行くものと思われ、新しい俳句表現の可能性を探る一つの手段かも知れません。

俳写でまちおし

私も参画している、ふじみ野市「俳写でまちおし」委員会では数々の質問や意見が飛び交います。

「レントゲン写真に俳句を付けても、俳写か？」等々。大変ユニークな一瞬考えさせられる発想。自分のフィルムであれば特に問題は無いのでは？と答えておきましたが、果たしてどのような作品が提出されてくるのやら…。お孫さんの撮った写真に、ご自分の句を添える方、アルバムに眠っていた古い写真に句を付けて、青春を詠む方等様々です。皆さん、自分の作品を創作するとなったら、色々な発想をするものだなと、改めてそのエネルギーに感じ入った次第です。

「俳写」の可能性を広げるためには敷衍を低く、数々の有職故実から解放していけば、これからの庶民文芸として、さらに発展してゆく予感が致します。